オレンジ郡仏教会お彼岸セミナー
（２０２４年３月１６日）

親鸞聖人の教えの核心

― 二つの障り（即ち、心の障りと身の障り）のちがい ―

羽田信生

I.　聖人の「正信偈」の釈迦章の二偈（１５−１７行）

　摂取の心光、常に照護したまう。すでによく無明の闇を破すといえども、貪愛・瞋憎の雲霧、常に真実の信心の天に覆えり。
　たとえば、日光の雲霧に覆わるれども、雲霧の下、明らかにして闇きことなきがごとし　（『浄土真宗聖典』、pp. 203-204）

A. 「正信偈」（９−１９行）の持つ意義

1. 聖人の教えの核心
2. 「正信偈」（９−１９行）が聖人の肖像画に書かれてある。

B. 親鸞聖人の『尊号真像銘文』（『浄土真宗聖典』、pp. 641-673）に「正信偈」（９−１９行）が釈されてある。

この著作の中で聖人は『大経』の経文や高僧の文章に釈を加えている。更に、この著作において、聖人は自分の「正信偈」の９−１９行を釈す。聖人が自分の偈文に釈を加えることは異例なことである。故に「正信偈」の９−１９行がいかに重要なものであるかが分かる。

II.　聖人の二種類の煩悩の見方

A. 「闇」（分別障または所知障）は破られる。「雲霧」（煩悩障）は破られないが転ぜられる。

1. 「闇」：分別障または所知障（十根本煩悩中の後五煩悩)：i) 有身見、ii) 辺執見、iii) 邪見、iv) 見取見、v) 戒禁取見 ―「心」（あるいは「見」）に関する煩悩。私達が生まれた後で身についた煩悩。（そのはたらきが早くて鋭いが、破られやすい。）
2. 「雲霧」：煩悩障（十根本煩悩中の前五煩悩)：i) 貪、ii) 瞋、iii) 痴、iv) 慢、v) 疑 ―「身」に関する煩悩。私達が、生まれながらもっている煩悩。（そのはたらきが遅くて鈍いが破られにくい。）

B. 「二種類の仏教」と「二種類の煩悩」

1. 聖道門と真宗のちがい

   a. 聖道門：聖道門の行者は、自分の人知（即ち、二元分別の心）は正しい方向へ向かっていると考える。苦しみの原因は身の中にある煩悩（即ち、煩悩障）であると考える。故に煩悩を諸行によって断ずることで、幸せな境地に至ろうとする。

   b. 真宗：親鸞聖人は、人知（即ち、二元分別の心、分別障）が顛倒していることが苦しみの原因であると考える。仏智の人との出遇いによって、人知の方向が仏智の方向に百八十度転換されることが救いであると考える。親鸞聖人は、煩悩を問題とする（あるいは断ずる）必要を認めない。人知が仏智に転換されると、煩悩は功徳に転ずると考える。

2. 親鸞聖人の「煩悩障」の見方

   a. 煩悩は臨終までなくならない。

      「凡夫」といふは、無明煩悩われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむこころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと、（『浄土真宗聖典』、p. 693）

   b. 煩悩は臨終までなくならないが、仏智（即ち「転悪成徳の智」）に遇うことによって、煩悩は功徳に転ぜられる。

      無碍光の利益より
      威徳広大の信をえて
      かならず煩悩のこほりとけ
      すなわち菩提のみづとなる

      罪障功徳の体となる
      こほりとみづのごとくにて
      こほりおほきにみづおほし
      さはりおほきに徳おほし（同、p. 585）

C. 信心の人は「二重国籍」を生きる：心は浄土を生き、身は穢土を生きる。

1. 「超世の悲願聞きしより、我らは生死の凡夫かは、有漏の穢**身**は変らねど、**心**は浄土に住みあそぶ」（『帖外和讃』）

2. 「不浄造悪の**身**なれど . . . その**心**すでに浄土に居す」（同、p. 759）

D. 「往生は心にあり。成仏は身にあり。」（曽我量深師）

1. 「往生は心にあり」：仏のチエ（すなわち慧）によって衆生の分別障 — 心に関する煩悩 — にもとづく生死流転が断ち切られ、衆生は信心（すなわち往生）を体験し、正定聚不退転の位につく。
2. 「成仏は身にあり」：仏のチエ（すなわち智）によって煩悩障 — 身に関する煩悩 — が転ぜられて、信心の人は充実した人生を生き、臨終の一念に成仏する。すなわち大涅槃（即ち、人生成就）を体験する。

III. 結

聖人の教えは、身（又は煩悩障）を問題とする教えでなくて、ただ心（又は分別障）の変革（即ち、信心体験）のみを問題とする教えである。聖人は心の変革は、私達の善知識の御教えを聴聞することのみによって実現されると言われる。